

11 雨中嵐山 幸野棹嶺 一幅

絹本着色
明治十五年（一八八二）
本紙一四一・五×六九・四

幸野棹嶺（一八四四〜九五）は、嘉永五年（一八五二）に円山派の正統を継ぐ中島来章に入門し、川端玉章などとともに修行に励んだ。師の来章は花鳥図を得意とした画家であったが、棹嶺は明治四年（一八七二）にはあらためて山水図を学ぶべく塩川文麟に入門し直して画風の幅を広げた。文麟は呉春からの流れをくむ四条派系列の画家であり、棹嶺の同門には野村文學などがいた。

本図は、柔らかな雨が満開の桜を濡らす春の嵐山で、ひとりの筏士が、上流の山で切り出された材木を筏に組んで保津川を下っている。名勝嵐山には馴染み深いこの筏流しの光景は、近世から京都の絵師たちが好んで描いた画題である。ちょうど川にせり出した桜の枝の下をくぐった男の頭上には、雨にうたれた花びらが数枚舞い落ちている。このような詩情的

な表現は、師の文麟ひいては呉春から受け継がれてきたものだろう。本図は明治十五年に龍池会より買い上げられたとの伝来があり、明治三十二年に竣工した日光の田母沢御用邸で室内装飾に用いられていたという。

本図の制作後も棹嶺は、明治二十一年（一八八八）に竣工する明治宮殿で、京都画壇の代表格として杉戸絵や格天井を揮毫する大役を果たし、同二十六年には帝室技芸員に任命された。これは京都では森寛齋に続く第二番目の選出であった。

棹嶺は京都府画学校開設や京都美術協会の設立に大きく尽力したことで知られ、また弟子を育てることを自身の天職であると信じ、竹内栖鳳、都路華香、谷口香嶠、菊池芳文などの大正期を代表することとなる多くの画家を育てた点でも近代京都画壇に与えた影響は大きい。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections